JOMON
CULTURE
STYLE BOOK

道南の達人が読み取る縄文からのメッセージ

縄文

食

ものづくり

自然

国宝 土偶／函館市縄文文化交流センター

JOMON CULTURE STYLE BOOK

函館市大船町／史跡 大船遺跡

生き方のヒント？
今と昔、縄文で語りつなぐ。

「縄文」と聞いて、皆さんは何をイメージしますか？

様々な文様がついた土器や土偶でしょうか。
はたまた、食べるものや着るものを自分たちで調達する、
自給自足のライフスタイルでしょうか。
遠い昔というだけで何のイメージもわかない、
そんな方もいると思います。

日本列島に生きた縄文の人々は、自然と調和した生活を営み、
1万年以上続いた世界に類を見ない文化を育みました。

このスタイルブックでは、縄文時代のライフスタイルから、
「食」と「ものづくり」、そして「自然」をテーマとして、
道南で活躍する各分野の達人の皆様からお話を伺い、
現在の私たちの生き方のヒントともなる縄文の知恵や魅力に迫ります。

これまで縄文に興味のなかった方にも、
学生時代から歴史が苦手という方にも、
気軽に縄文の世界に触れていただきたいと思います。

ようこそ、縄文ワールドへ！

目次 CONTENT

03.04 ページ　ココだけは押さえて！ ちょこっと 縄文講座

05.06 ページ　食と縄文
語り手01／杉村直紀氏　語り手02／金子岳夫氏

07.08 ページ　ものづくりと縄文
語り手03／大宮トシ子氏　語り手04／藤吉大志氏

09.10 ページ　自然と縄文
語り手05／山田貴久氏　語り手06／中田弥幸氏

■本誌掲載の文章・写真・イラストの無断転載を禁じます。
■各画像の著作権は、各所属機関に帰属します。

史跡 垣ノ島遺跡

角偶／市立函館博物館

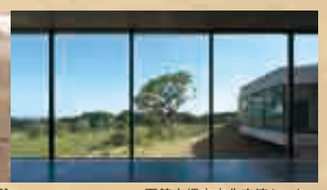
史跡 鷲ノ木遺跡

七飯町歴史館

けつ状耳飾／吉岡総合センター

土器／市立函館博物館

史跡 垣ノ島遺跡　発掘体験



函館市縄文文化交流センター

ココだけは押さえて！

ちょこっと

縄文講座

世界遺産？　国宝？　土器？　土偶？

Q1 縄文ってどんな時代？

今から1万5千年前、数万年続いた氷河期が終わると、日本列島ではドングリやクリが実る落葉広葉樹の森が広がり、魚介類が豊富に生息できる地形が形成されました。この**豊かな自然環境を背景に発展したのが縄文という時代**です。

それまでの旧石器時代と大きく違う点として、土器の存在があります。**土器の発明**により、例えばそれまで食べられなかったものが、煮炊きすることにより食用が可能になりました。

円筒上層式土器

遺跡や出土品などから、**縄文人は自然と共に生きる知恵や高い精神性を持った人々だった**ことが分かっています。気候変動や自然災害にも巧みに適応しながら、**縄文時代は1万年以上も続きました。**

Q2 道南の縄文の特徴は？

北海道の南部、道南地域では、**世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」**の構成資産である大船遺跡と垣ノ島遺跡、関連資産である鷲ノ木遺跡といった遺跡をはじめ、**国宝に指定されている中空土偶**など貴重な遺物も多く見つかっています。

また、道南地方の縄文は、**北東北とのつながり**があることも特徴です。渡島半島は、津軽海峡を隔てて北東北地域と向き合っていますが、両地域では同じ文様の土器が出土するなど、津軽海峡を通じて人とモノが活発に行き交い、**同一の文化圏を形成**していました。

函館市大船町／史跡 大船遺跡

Q3 縄文が世界遺産？

北海道と青森県・岩手県・秋田県の北東北3県は、2007年に共同で世界文化遺産への登録をめざすこととし、それ以降、登録実現に向けて様々な取組が進められてきました。そうした取組に携わってきた多くの関係者の熱意と努力が実り、北海道から北東北に残る17の遺跡で構成される**「北海道・北東北の縄文遺跡群」は、人類共通の宝として認められ、2021年7月に世界文化遺産に登録されました。**

Q4 改めて世界遺産って？

世界遺産とは、**地球の生成と人類の歴史によって生み出され、過去から現在へと引き継がれ、そして私たちが未来の世代に引き継いでいくべきかけがえのない宝物**です。

UNESCO（国際連合教育科学文化機関）は、世界遺産を**“人類共通の遺産”**として保護・保全していくための国際的な協力体制を築く国際条約として、1972年の総会にて「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」（通称：世界遺産条約）を採択しました。

見て、聞いて、体験できる
道南の縄文は、まずここから！

① 函館市縄文文化交流センター

所在地　函館市臼尻町551-1
電　話　0138-25-2030

WEB MAP

国宝カックウに出会える！

6千年間続いた縄文ムラ！

② 史跡 垣ノ島遺跡

しせき　かきのしまいせき

所在地　函館市臼尻町416-4

WEB MAP

縄文人が愛した海を望む絶景！

③ 史跡 大船遺跡

しせき　おおふねいせき

所在地　函館市大船町575-1

WEB MAP

ほかにもたくさん！
渡島管内縄文関連展示施設など
見どころいっぱい！

詳しくはこちらから

知れば知るほどおいしい。
縄文時代に思いを馳せる縄文会席。

語り手 01

函館大沼プリンスホテル
料理長
杉村 直紀 氏
すぎむら なおき

PROFILE

壮瞥町出身。
札幌の調理師専門学校卒業後、
函館大沼プリンスホテルに就職。
2021年から料理長に就任。
これまでに世界遺産グルメ縄文会席をはじめ、
アイヌ伝統料理を現代風にアレンジした
メニュー開発などに携わる。

道南の秀峰駒ヶ岳。この山は縄文人にとって特別な存在であったと考えられており、森町にある鷲ノ木遺跡からは、立冬が近づくと駒ヶ岳頂上付近に朝日が昇る神々しい様子が見られる。そんな地で誕生したのが「世界遺産グルメ縄文会席」だ。縄文人が食べていたと言われる食材を使い、現代の調理方法を駆使して仕立てられた和食会席で、函館大沼プリンスホテルの料理長 杉村直紀さんが企画した。

杉村さんは、札幌の専門学校を卒業後函館大沼プリンスホテルに就職し、料理人として働くなかで縄文という遺産を知ったという。
「国宝・中空土偶の精巧さや、縄文時代には大きな争いがなかったことを知って、洗練された文化だったということに気づかされました」
縄文会席の企画にあたり、改めて縄文を学び直した杉村さん。知れば知るほど縄文の魅力にはまり、想像は膨らんだという。
「多様な自然環境を背景とした四季折々の食材や、土器の発明により調理方法が飛躍的に増えたことを考えると、縄文時代の食事は私たちの想像よりも豊かだったかもしれません」

杉村さんの想像はそこからまた一歩先へ進む。
「縄文時代の生活を想像するに、生きるために食べるということが大きなウェイトを占めていたと思いますが、食べるのをためらうような見た目をした食材も食べていて、食に対する好奇心が旺盛だったと考えることもできるのではないでしょうか。そう考えると、現在の私たちの食環境は縄文人が切り開いてくれたとも言えるかもしれませんよね」

縄文会席

縄文会席を食べていただいたお客様には、現地にも足を運んでほしいという。「縄文のストーリーとセットで食事を楽しむことによって、身体も心も満たされると思います」縄文会席は、遺跡や博物館とセットでどうぞ。

杉村さんが読みとる縄文からのメッセージ

縄文からは、地産地消や食品ロスといった、
現代の食にまつわる課題・問題に対する解決のヒントが見つかるはず。
縄文時代の食環境に思いを馳せつつ、
現在の私たちの豊かな食環境に感謝の気持ちをもちたいですね。

ちょこっと
縄文コラム
グルメな縄文人

縄文人は、海、川、そして山から、季節毎に旬の食材を調達していました。
北海道太平洋岸の縄文人は、他の地域の縄文人と比べ、山の幸より海の幸を多く食べていたようで、バフンウニやマグロなども食べていました。
食べることは生きること。縄文時代は現代と比べものにならないほどサバイバルな生活だったと思われますが、現代の私たちと同じで、美味しい食事が一日の楽しみだったのかもしれませんね。

食料の季節変化を表した縄文カレンダー
（小林達雄氏の創案図をもとに作成）

海を越えたクリ。
ロマンをたっぷり込めた縄文ビール誕生秘話。

語り手 02

株式会社アドバンス
函館支店長
金子 岳夫 氏
かねこ たけお

PROFILE

横浜市出身。
小学生の時に、函館に移住。
乳業メーカーでの勤務を経て、
株式会社アドバンスに入社。
2020年から縄文ビールの開発に着手し、
同年5月からアドバンスが運営する
「Endeavor」にて量り売りでの販売を開始。

北海道・北東北の縄文遺跡群が世界遺産に登録されたのが、2021年7月のこと。世界遺産登録に先がけて、縄文人の生活を支えたクリにこだわった「縄文ビール」の開発を進めていたのが、クラフトビール醸造所併設のレストランEndeavor（エンデバー）だ。
「実際は酒類のカテゴリー上発泡酒扱いになるので、瓶詰めでの販売第１弾は、「縄文MINORI（ミノリ）」で2023年5月から販売を開始します」そう語るのが、Endeavorを運営する株式会社アドバンス函館支店長の金子さんだ。ここでは便宜上、縄文ビールと呼ばせてもらう。

縄文ビール開発のきっかけは、“縄文の心でひととまちをつなぐ”をコンセプトに、縄文の魅力を発信している有志団体「縄文DOHNANプロジェクト」の懇親会だった。メンバー同士で何気なく話している中で、「縄文ビール」というワードが出てきた。アイディアがいくつか出てきたが、縄文時代から食べられていたクリを原材料にという声に多くのメンバーが賛同した。

「調べてみたところ、クリは縄文以前北海道に自生しておらず、津軽海峡を渡って北東北から持ち込まれたということが分かりました。縄文時代から、道南と北東北に暮らす人々が津軽海峡を越えて交流していたということに雄大なロマンを感じました」と金子さんは語る。

「縄文ビールには、海を渡ってきたクリという縄文人の海洋ロマンが詰まっています。縄文のストーリーを感じながら縄文ビールを楽しんでいただきたい」あなたも、縄文ビールから壮大な縄文の歴史に触れてみませんか。

縄文ビール

金子さんが読みとる縄文からのメッセージ

縄文人が作り出した土器や土偶などの美的センスは、世界にも大きなインパクトを与えています。日本人の立ち返るべき文化的価値観として縄文文化があるのではないでしょうか。
便利な現代社会を生きる私たち現代人にとって、
縄文時代の精神性を学ぶ価値は大いにあると考えます。

ものづくりと縄文

語り手 03

北の縄文CLUB 代表 大宮トシ子（おおみや としこ）氏

PROFILE

旧南茅部町（現在の函館市）出身。
1994年から南茅部町埋蔵文化財調査団
作業員として、2011年8月まで遺跡発掘に従事。
同年10月からは
函館市縄文文化交流センターで勤務。
2009年から北の縄文CLUB会長に就任。

土器を作り続けて25年。理想の土器づくりはこれからも続く。

世界遺産の大船遺跡でガイドとして活躍する大宮トシ子さんは、数十年の長きにわたり縄文に携わり、多くの方々に縄文の魅力を伝え続けてきた。縄文に触れたきっかけは、遺跡発掘のアルバイト。「もともと縄文に興味を持っていたわけではありませんでした。友達に誘われたので軽い気持ちではじめてみたら、どんどん縄文の魅力にはまっていきました」

発掘の作業では、縄文人が作った土器のかけらを取り上げ、よく観察して、もとの形に復元していく。この作業の中で、縄文人はどのように土器を作ってどのように使ったのかを考えるようになったという。「ある日、指の痕がついた土器を見つけました。その土器を観察していると、ふと縄文人も自分たちと同じだと感じました。遠くに感じていた縄文人をぐっと身近に感じる体験でした」そのうちに大宮さんは、自分でも土器を作ってみたいという欲求に駆られるようになる。その想いと時を同じくして発足したのが縄文文化の普及を目的に設立された北の縄文CLUBだ。大宮さんは会員番号1番。

CLUBの仲間内で土器を作ってみたのが、大宮さん初めての土器作り。「最初は手伝ってもらいながら作り上げましたが、完成したときにはとてもうれしかった。土器を焼く野焼きも初めての体験。炎の勢いがすごくて、髪の毛は焦げるし、顔も真っ赤になって大変だったけど、それも楽しかった」

野焼きの様子（撮影：山田貴久）

初めての土器作りから25年。理想の土器を目指して毎年欠かさずに土器を作っているが、それでも縄文人には敵わないという。「自分で土器を作る度に、縄文人のすごさを感じます」大宮さんの土器づくりはこれからも続く。

大宮さんが読みとる縄文からのメッセージ

縄文時代の人たちが作った土器や道具をよく観察すると、
どれも丁寧に作っていることに気づきます。
地に足が着いた生活をしていた人たちが
多かったのではないでしょうか。

ちょこっと 縄文コラム 縄文人の手しごと

博物館に展示している縄文時代の出土品は、あたり前のことですが縄文人が手作りしたものです。
生きるため必要に迫られて作った弓矢や釣針、装身具として作った耳飾りや櫛、土偶のような、どのような用途で作成したか分からないモノもありますし、生活に必要だった土器だって、煮炊きに使うだけであれば周りの文様は必要ないはず。縄文人は何を思ってモノを作っていたのか、そんな想像をしながら博物館の展示品を見てみてください。
縄文人の息遣いを感じ取ることができるかもしれません。

道南の出土品

①土偶の顔
（木古内町郷土資料館いかりん館）
②人面装飾付異形注口土器
（北斗市郷土資料館）
③帯留め様土製品
（知内町郷土資料館）
④土偶（松前町郷土資料館）

ものづくりと縄文

語り手 04

陶芸家・（一社）かやぶきの家 まねきや 代表理事 藤吉大志（ふじよし たいし）氏

PROFILE

福岡県出身。
2010年から栃木県市貝町に移住し、
陶芸家 小林白兵衛に師事。
2014年に妻の出身地である北海道へ移住し、
作陶を続ける。
かやぶき屋根の古民家を借り受け、
2020年から「多世代型放課後クラブ
『かやぶきの家 まねきや』」をオープン。

失敗を恐れず、まずは何でもやってみる。それって縄文時代も一緒では？

陶芸家として七飯町に工房を構える藤吉大志さんは、なぜだか昔から縄文時代には親しみを覚えていたそう。「教科書が嫌いで歴史も苦手だったけれど、縄文時代は昔から好きでした。自給自足の生活や陶芸家という職業など、今の自分につながる何かを縄文から感じ取っていたのかもしれませんね」

藤吉さんは縄文土器に対して、一陶芸家として尊敬の念を抱くという。「時間のかけ方がすごい。時期によってはかなり大型の土器もあって、相当な時間をかけて制作していたのだろうと思います。現代の私たちの時間感覚とはかなり異なった次元で生活していたのではないでしょうか。土器を作るという作業自体に楽しさを見いだしていた、そんなパワーを感じる土器もありますね」と語ってくれた。

藤吉さんには陶芸家の他に、放課後児童クラブの運営者としての顔もある。北斗市市渡にある「かやぶきの家　まねきや」で、十数名の子どもを預かっている。藤吉さんがまねきやで大切にしていることが、最初から最後まで可能な限り全ての工程を自分でやってみるということ。野菜や果物、家に飾る置物、そしてなんと竪穴住居まで。これら全部、皆で手作りしているそう。

まねきやで作った竪穴住居

「竪穴住居は、作り方を調べずにえいやっ！で作り始めました」そんなやり方だから、失敗もつきもの。「縄文人も何かモノを作る時には、きっと失敗の連続だったと思います。そこから知見やノウハウを得ていた。失敗から学ぶことが大事、ということは縄文時代も現代も変わらないのではないでしょうか」まねきやは失敗が許される場所。ここにも、縄文の精神が息づいている。

藤吉さんが読みとる縄文からのメッセージ

縄文時代の人たちは、自分のノウハウやスキルを自分だけで抱え込むのではなく、積極的に周囲とシェアしていたのではないでしょうか。
今自分ができる最善を皆で共有する。
そこには、現代にもつながる豊かさの本質があるような気がします。

自然と縄文

自然が作り出す造形は縄文時代も同じ？
縄文人の美的センスはどこから…

語り手 05

（モノトーン・ブレインズ）monotone-BRAINS
代表
山田（やまだ） 貴久（たかひさ） 氏

PROFILE

旧南茅部町（現在の函館市）出身。
新横浜ラーメン博物館で企画運営等に従事した後、2011年南茅部地区にUターン。
ホテル函館ひろめ荘で土日祝限定で提供している縄文拉麺の開発や、縄文とテクノ音楽を融合したライブイベントの開催等、縄文に関する企画を多数実施している。

「ロックウォーキングをすれば縄文人を疑似体験できます」ロックウォーキングという聞き慣れない言葉で縄文について語ってくれたのは、函館市南茅部地区在住の山田貴久さん。ロックウォーキングとは平たく言うと、潮が引いた海岸の岩場を歩くということだそう。

山田さんは世界遺産の大船遺跡・垣ノ島遺跡を有する縄文のふるさと南茅部の生まれ育ちだが、その価値に改めて気づいたのは、道外での仕事を経て南茅部に戻ってきてからだった。「様々なクリエイターと一緒に仕事をして自分自身のものの見方も変わってきた中で、なじみ深い地元の縄文を見つめ直してみると、その芸術性の高さに驚かされました。それと同時に、縄文人の美的センスはどこから来たのかということに疑問を持ちました」

その疑問がロックウォーキングによって解決したという。「ある日、ロックウォーキングをしていてふと、縄文人の美的センスは自然と向き合う中で培われたのではないかと感じました。海岸を歩いていると、波に浸食された岩場や打ち上げられた魚や貝など、様々なものが目に飛び込んできます。そこに見る造形が縄文土器などのデザインに類似しているんです。縄文人はそれらを見て想像力を働かせてインスピレーションを受けていたのではないでしょうか」

縄文人にとって創作物のモチーフとなっていたかもしれない自然だが、もちろんたくさんの危険も潜んでいる。「ロックウォーキングをしていると多少危険な場所もあります。縄文人はそういった危険も察知しながら日々自然に分け入ったのだと思います」自然と真剣に向き合うことで、縄文人の感性の一端に触れることができるかもしれない。

ロックウォーキングの様子

山田さんが読みとる縄文からのメッセージ	縄文遺跡や遺物に見る縄文人の感性。 自然を敬い、畏れる。生活の糧、恵みを与えてくれる一方、時に牙をむく自然とどのように向き合ったかを考えることは、 自然災害が多くなってきた現代社会に必要なことではないでしょうか。

自然と縄文

縄文人は自然と共に生きた先輩。
その知恵や技術は今も、そしてこれからも。

語り手 06

（ハコダテアドベンチャーツアー）HAKODATE ADOVENTURE TOUR
代表
中田（なかた） 弥幸（ひろゆき） 氏

PROFILE

函館市出身。
高校時代に大沼でカヌーと出会う。
2020年に
HAKODATE ADOVENTURE TOURを開業。
函館市内を流れる2級河川「汐泊川」を拠点に函館の自然の魅力を発信しながら、環境保護や防災活動なども積極的に行っている。

HAKODATE ADOVENTURE TOURの中田弥幸さんは、函館の奥座敷、湯の川温泉の近くを流れる汐泊川（しおどまりがわ）でカヌーツアーを行い、函館の自然の魅力を伝えている。実はこの汐泊川、付近に多数の縄文遺跡が見つかっている。「縄文人がこの地を拠点としたのは生活が成り立ったから、つまり食料が豊富に取れたからだと思います。縄文人も今の自分と同じような景色を見ながら生活していたと思うと感慨深いですね」

中田さんのツアーに参加すると、動植物の生態や自然の不思議について様々な話を聞くことができるが、そこに「縄文」というワードも飛び交う。「例えばですが、縄文時代は海水面が今よりも高かった。川も生き物で、毎日流れも変わるし、水量も変わる。縄文人はそういったことも分かった上で、高台に集落を構えていました。といった具合に、汐泊川の自然を解説していると、自然と話は縄文につながります」縄文人が自然と共生したということは博物館で知識として学べるが、フィールドに出ると生きた知恵として吸収できる。「自然を相手にしていると、毎日が試行錯誤の連続。そんなときに、きっと縄文人もこんなふうに工夫して生活していたのかなと感じる瞬間がたくさんあります」

汐泊川でのカヌーツアー

中田さんは今、この環境を次世代に引き継ぐことの難しさを感じているという。「地元のことを自慢できる、誇りに思っている、そんな子どもたちをもっと増やしていきたいです。そのためには地元を知ることが第一歩。小さい頃から自然に触れることで、様々な気づきを得てほしいし、豊かな感性を育んでほしい。この地で縄文の時代から受け継がれてきた知恵や技術を次世代に繋げていきたいです」

中田さんが読みとる縄文からのメッセージ	狩りをして捕らえた動物は、肉だけでなく骨や皮まで利用していた縄文人。 使えるところだけ取って捨てるというやり方ではなく、 自然に感謝する精神を強く感じます。

ちょこっと
縄文コラム
縄文人と自然環境

縄文人は自然の恵みに支えられながら生活していました。しかし自然は時に猛威を振るいます。1万年以上に渡る縄文時代のなかでは、寒冷化で人口が減少し、集落が縮小・分散した時もありました。そのような困難に直面した縄文人は、分散した集落の結びつきを強めるため、複数の集落が協力して、環状列石のような共同の祭祀場や墓地を構築して、維持・管理しました。技術が進歩した現代においても、私たちは自然に生かされています。自然を敬い、その変化に適応した縄文人から学ぶことはたくさんあります。

北海道最大規模の環状列石を伴う史跡 鷲ノ木遺跡
（出典：JOMON ARCHIVES）

制　作
北海道渡島総合振興局 保健環境部環境生活課